

令和7年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学 校 名	校 長 名
107	川崎市立東柿生小学校	後藤 智春

学 校 教 育 目 標	今年度の重点目標
一人ひとりの子どもの笑顔が輝く学校の創造 ～児童・保護者・地域・教職員により共育する学校～	I 確かな学力を育む 粘り強く、自ら学びに向かう子 II 豊かな心を育む 自分と友だちを大切にする子 III 健康な体を作る 力を合わせ、たくましく挑戦し、健康な心身を作る子 IV 地域と共に生きる ふるさと東柿生を大切に思う子

評価項目	具体的な取組	○成果と▲課題	具体的な改善策
確かな学力を育む	①生きて働く知識・技能の習得と活用 ○単元のつながりや、1年から6年までの知識の系統を意識した授業の展開 ○短時間学習の計画的運用 ○個に応じた学習支援の充実	○今の単元で獲得した知識や技能が次の単元でどのように発揮できるか教師が見通しをもつことで、児童が既習を使って学びに向かう瞬間を見逃さず価値づけることができた。 ▲教科数が多いこと、教師の授業スタイルによって統一が難しいことなどがあげられる。 ○朝の短時間学習を固定化して実施した。「月曜は朝読書の時間」とし、PTAの保護者の方のご協力をいただきながら、週1回程度の読書の時間を確保することで、本に触れる機会を持つことができた。 ▲朝の短時間学習は、国語科における基礎学力の向上の時間として学校全体で取り組んだが、計画的・効果的な運用と教育課程への適切な位置づけの確認・検討については、今後も継続的に取り組んでいく必要がある。 ○副C0を配置することで、取り出し支援が行える人数や時間が増え、児童理解と学習支援が充実した。 ○「個別最適な学び」の実現に向けて一人ひとりの資質能力を高めるための活動の充実を図った。「学ぶこと」の楽しさや意義を実感したり、社会へのつながりを意識したりすることができた。	・学習に集中できる環境づくりに一層努めていく。基礎基本を徹底するための手立ての1つとしてGIGA端末を活用し学習する習慣を図る。 ・教科部会ごとにあつまり、学年ごとの知識技能がどのように繋がっていくか、系統性を話しあい、共通理解を図る。 ・朝の短時間含めた60分授業や外国語、読書等の活動時間として計画的に運用し、朝の短時間学習のさらなる充実を図る。 ・主体的に学ぶ姿勢、自立する子どもを育成していくために、多様な学びの提供、課題設定、学習環境等の授業改善の工夫に努める。

②思考力・判断力・表現力の育成	○文科省の目指す令和の日本型学校教育を取り入れた校内研究の推進 ○問題解決学習の充実	○研究テーマを「一人一人が学びの主役！目標に向かって学び方をデザインしながら自ら学びに向かう子どもの姿を目指して」と設定し、各教員が自身の指導力向上と授業改善に尽力できた。 ○個別最適な学びを大切にしながらも、学びが孤立化しないように個々の学びを様々な形で共有しながら互いを認め合える時間や場を設定した。これにより子どもたち自身が協働的に学ぶことの意義や価値に気づき、進んで友達と学ぶようになった。 ○基本的な知識・技能を活用しながら課題を解決する学習活動を通して、思考力・判断力・表現力を高めた。また、課題に粘り強く向かうことができるよう環境づくりに努めた。 ▲今一度「基礎学力とは何を指すのか」「これからの時代を生き抜く子ども達に本当に必要な力は何なのか」を教職員全員で話し合い、共通理解していく中で、確かな学力を育む子どもの姿をイメージし直す必要がある。 ▲各教員がもつ指導観や、授業観を不断に見直し、子ども主体の学びを今後もさらに追及していく必要がある。	・児童の実態に合わせ、主体的・対話的で深い学びの実現を意識した単元計画の作成に努める。 ・身の回りにある課題や社会問題を題材とするなどの学習活動を取り入れ、生きる力を培うとともに思考力・判断力・表現力の育成を図る。 ・6年間を見通した資質能力の育成を視野に入れた系統性を重視したカリキュラムマネジメント、授業改善に努める。
------------------------	--	--	--

	③学びに向かう力 人間性の滋養	○自ら学びに向かい、 学びを貫く力の育成 (学びに向かう姿勢の育成) ○地域の特徴を生かした 魅力ある単元づくり (キャリア在り方生き方教育)	○どの教科でも汎用的に使える見方・考え方と、各教科独自の見方・考え方を区別して発揮できる授業を組み立てていくことで、粘り強く学ぶ姿だけでなく資質能力の向上を意識した学びをできる子どもが増えた。また、Dパレットなど使い、振り返りを積み重ねていくよう指導していくことで、より子ども一人一人の自己調整力を伸ばすことができた。	・一人一人の問題の見出しとふりかえりを大切にしながら、問題解決能力と自己調整力の育成を図る。
	①協力・認め合い	認め合い、協力し合う 学級づくり (学級活動・係や当番活動等)	○学級活動の取り組みや、係や当番活動等を通した協力や認め合いの経験を通して、児童は「友達と支え合っている」と強く感じている。このことは、学級満足度の高さにもつながっていた。 ▲協力や認め合いの機会は、時に児童間の衝突やトラブルにもつながった。そうしたことも含めて経験や学びではあるが、困り感をなかなか払拭できない部分もあった。	・より多くの教職員による、より適切な学級編成を行い、少しでも無理のない学級づくりをめざしていく。
豊かな心を育む	②奉仕・努力	児童による自主的活動の推進 (行事・クラブや委員会、児童会活動等)	○運動会をはじめとした全校的な行事の他、クラブや委員会等の活動、児童会活動等での取り組みを通して、児童による自主的活動を促してきた。その結果、全学年の児童が、誰かのために動く喜びを感じることができた。特に、全校児童の中心になって活動する高学年の活躍は、学校生活の随所に表れていた。 ▲全校的な行事を始めとして、委員会活動の枠組みを利用することが多かったが、委員会活動間での活動量の違いが大きくなってしまった。	・委員会活動の仕事の見直しを行い、より多くの児童が自主的活動に参加できるようにしていく。
	③異学年交流	異学年交流を通した 社会性の伸長 (授業や行事・スマイル班活動等)	○1年生から6年生までの児童が定期的に交流するスマイル班活動だけでなく、低・中・高学年でそれぞれに行われた運動会の表現運動での異学年交流、生活科や総合的な学習、国語等を通した授業における異学年交流等も、盛んに行われた。その際にスマイル班の枠組みを利用することもでき、異学年交流を更に深めることができた。 ▲事前に計画や準備が必要なスマイル班活動の中心は、児童にとって貴重な中休みであることが多く、活動の中心を担う6年生の負担になる部分もあった。	・6年生の負担感を少しでも減らすことを前提に、行事や授業での異学年交流が行われることも踏まえて、スマイル班活動の回数や内容を検討する。
	①道徳教育、人権尊重教育等を基盤とした心の育成	○かわさき共生・共育プログラムの実践 ○豊かな感性をはぐくむ 人権尊重教育の推進	○年3回、効果測定を実施し、学級や学年の実態に合わせたプログラムを実践した。 ○人権週間における児童の主体的活動として、代表委員会からの提案で「人権の木」を作成した。「自分が大切にされた」と感じたエピソードを共有することで、人権や人とのかかわり方について考えることができた。	・年度初めの学級づくりや長期休業明けに、かわさき共生・共育プログラムを実施し、よりよい人間関係づくりを促す。 ・児童会スローガンや月の生活目標と関連付け、年間を通した計画を立てる。
健康な体を作る	②安全・健康教育の充実	○児童の健康・安全に対する意識の向上 ○防災・防犯教育の推進と自らの安全を確保する能力の育成	○1年と4年の交通安全教室、6年の薬物乱用防止教室、養護教諭による良い姿勢の指導、歯磨き指導等を行い、児童の健康・安全に対する意識を向上を図ることができた。 ○防火扉を使った訓練や不審者対応訓練を行い、自らの安全を確保する能力を育成することができた。	・発達段階にあわせた課題予防的生徒指導を充実させる。 ・トラブルの未然防止のため、情報モラルについて十分に扱うようカリキュラムに位置づける。 ・教室外からの避難、休み時間に起きた場合など様々なパターンの訓練を行う。

る	③子どもが安心して過ごせる学校の創造	○支援教育コーディネーターを中心とした安心安全な学校づくり ○学校生活アンケートの実施による安心に過ごせる学校づくりの推進 ○学校の相談体制の充実と巡回カウンセラーとの連携	○月1回の校内委員会を実施し、支援を必要とする児童の把握、早期対応に努めた。 ○アンケートとあわせて実施した担任との全員面談により、児童一人一人に寄り添う学校風土をつくることができた。 ○担任のみでなく、養護教諭や支援教育コーディネーターにも相談しやすい体制を作り、巡回カウンセラーと連携して支援することができた。 ▲巡回カウンセラーへの相談件数が少なく、活用しきれなかった。	・校内委員会で学校全体の支援ニーズを把握し、児童支援のPDCAサイクルを整え、より効果的な手立てを打てるようにする。 ・年度当初に巡回カウンセラーを紹介し、学校だよりや掲示物等で来校日を周知する。
	①地域社会と連携した安全な環境作り	○安心安全な学校づくり	○都市計画道路の工事に伴い、拡張工事が実施されている。防犯パトロールボランティア、PTAの方々などが一体となった「安全パトロール」は、児童の登下校時の安心安全に大きく貢献した活動となっている。今後も定期的な通学路点検及び災害時を想定した重点的な点検等を図っていく必要がある。 ▲防犯パトロールボランティアの方の高齢化に伴って、年々人数が減ってきている。工事により通学路が1部変更となり、迂回して通学している児童がいる。	・「いっしょにまわろうパトロールの日」を実施することで保護者とともに子どもたちの登校の安全を見守った。今後はさらに意識を高めて継続していきたい。 ・登下校や学習時の防犯パトロールボランティアの見守りの継続をお願いするとともに、子どもたちにとっても地域の方とのよき交流の機会としていく。
地域とともに生きる	②学校と保護者・地域との連携	○学校からの情報発信する機会の充実 ○保護者・地域の声を学校経営に生かす	○学校便り、学校ホームページ、配信メール等を活用し、学校での取り組みを発信した。学校だより・学年だよりを1枚に統合することで、情報を整理して閲覧しやすくした。また、QRコードを掲載することで情報にアクセスしやすくした。 ○学校公開日、学校運営協議会、保護者アンケート等で保護者・地域の意見を集めることに努めた。次年度の行事に生かしていきたい。	・学校経営方針・学校評価等の掲載を含めたHPの計画的な更新を推進し、情報発信の場として活用していく。 ・地域や保護者の声を全職員で共有し、保護者や地域との連携や職員の学校運営への主体的な参画の強化を図る。 ・地域や保護者の教育力を学校運営に生かすためにも学校の取り組みを知ってもらう機会を充実させる。
	③地域社会と連携した活動の充実	○地域と連携した教育活動の活性化 ○持続可能な地域を創出する児童の育成	○生活科・総合的な学習の時間などを中心に、地域での活動を取り入れたカリキュラムマネジメントの推進を継続した。禅寺丸保存会、早野お囃子連や、福祉事業所『があでんららら』、早野里山ボランティアの方々など、地域との連携・協力の機会をもつことができ「地域に開かれた学校」づくりにつながった。また、各学年が地域を材として学ぶ中で地域の伝統や良さを発見し、「下の学年に伝えて繋いでいきたい」という、郷土を愛する心を育むことができた。 ▲地域との関わりを持つことで魅力ある単元づくり・教育課程の充実を図ることができた。今後もより幅広い視野をもって教育課程のさらなる充実を追究していく必要がある。 ▲寺子屋事業については地域の人材集めが難しく、なかなか進んでいない。	・地域に目を向け、大事な教育力として単元づくりに効果的に取り入れていく。児童が地域への関心を深め、地域の一員としての自覚をもって郷土を愛する気持ちや態度を育んでいくことをめざしていく。 ・寺子屋事業に関しては、地域教育コーディネーターの方を中心にして、運営に協力していただける方を引き続き探していく。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
----------	----------

- ・先生方が思いをもって子どもに向き合い、学びを深めていることが伝わってきた。東柿生小だからこそできる地域学習をこれからも続け、発信して欲しい。
- ・GIGA端末が 多くの授業で効果的に活用されており、学習の深化に寄与していることが伺える。今後も個に応じた学びの実践を継続することを望む。
- ・相談体制の充実には、コミュニティ・スクールの特色を活かし、地域ボランティアを募るなどして相談体制のさらなる充実を図る事も考えられる。
- ・授業参観等を通じ、児童の「主体的な学び」の姿を保護者へ積極的に示し、共通理解を深めることが大切である。教職員自身も学び続ける姿勢共有し、さらなる授業改善に努めていただきたい。

- ・学校教育目標の具現化のために、大きく4つの柱を立てて、学校運営に取り組んできた。学校組織づくりの一環として、教頭をはじめとして総括教諭と支援教育コーディネーターを各柱の責任者として、1年間取り組み、学校づくりアンケートをもとに成果と課題、次年度に向けた改善策を考えた。学校づくりアンケートの結果と考察、ここに挙げた課題や次年度に向けた改善策を全教職員で共有し、新たな本校の目標・重点の設定に取り組んでいきたい。
- ・今年度「教職員の授業力の向上」や「地域の特色を生かした単元づくり(郷土愛)」「安全安心な学校づくり」「異学年交流を通じた社会性の伸長」などの教育課程の充実を図ることができた。次年度も学校運営協議会の委員の方々のご意見を参考にしつつ、児童・保護者・地域の皆さんと共に教職員一同力を合わせて、一人ひとりの子どもの笑顔が輝く学校づくりに取り組んでいきたい。